



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二十一号〜

霜降そうこう

十月二十四日



古タオル

二十四節気の言葉には繊細なものが少なくありません。霜が降りる頃という「霜降」もその一つ。十月初めの露が草々に宿る「寒露」から半月のち、今度は天から霜が降る「霜降」へ、秋の深まりを自然界の小さなさざしから受け取っています。

霜が降りるのは伊勢ではまだ早いようですが、夜が随分と長くなりました。夜長というと何か手持ち無沙汰になります。せつせと手仕事に精を出す女性を知りました。

近頃では、学校へもっていくぞうきんは新しいタオルのものと決められていますけれど、かつてぞうきんは、使い古しの古タオルを再利用していました。新しいタオルをぞうきんにするなんて「もったいない」と思っている女性は多いのではないのでしょうか。

その方は、古タオルをぞうきんにするだけでなく、さらにアクリルの毛糸を使って絵をステッチしていました。ぐるぐると円を書いて、カタツムリに。三角形をつなげて金魚に。金魚の口からは、小さな丸を散らした泡ぶくが出て・・・赤や緑の色のついた毛糸を使うと細い糸よりも図柄が際立つ効果があります。また、大きなバスタオルも同じようにアクリルの毛糸でステッチをするとかわいらしいバスマットに早変わりです。

「近所にも差し上げると、特に小さい子どもさんが喜んで使ってくれます」。余った毛糸を使う一工夫で古タオルのぞうきんをよみがえらせる、そんなところに惹かれます。余った毛糸を探してみようか、秋の夜長にふと思ったのでした。

文 千種清美